

熊野古道とサンティアゴ巡礼路 —「二つの道の巡礼者」の比較—

大原志麻（静岡大学人文社会科学部准教授）

The Kumano and Santiago Pilgrimage Routes —A Comparison of Dual Pilgrim

Shima OHARA

Associate Professor, Faculty of Humanities and Social Science, Shizuoka University

While *michi* (roads) have been booming in recent years, there is a common thread of pilgrimage between the Santiago pilgrimage route and the Kumano Kodō, now one of only two *michi* (road) world heritage sites in the world. These pilgrimage routes trace their origins back more than a thousand years and are located on the geographical periphery of each country. The Santiago pilgrimage route was established by the Asturian kingship, and as the association with the royal power, such as the pilgrimage by the king, was abolished, it became supported by folk beliefs. The Kumano pilgrimage was established by seven Emperors Emeritus, who participated in 101 pilgrimages over a period of 190 years. After the emperors stopped visiting so many local people travelled this route that the phenomenon was labelled the “Kumano pilgrimage of ants.”

In 2015, a "Dual Pilgrim" was created for the Santiago Pilgrimage Route and the Kumano Kodō, and in 2016, certificates were issued to those who walked and made the pilgrimage to the two sacred routes. In this paper, I review the comparative history of the pilgrimage of the two roads, as well as examine the current situation and future topics of these two routes based on my own experience of walking the "French Way", one of the Santiago pilgrimage routes last year, and becoming "Dual Pilgrim" by walking from Takijiri Oji of the Kumano Kodō to the main shrine of Kumano Taisha, and visiting the three mountains of Kumano this year.

はじめに

近年「道」がブームになっている。スペインではサンティアゴ巡礼路をはじめとして、カルロス1世（神聖ローマ皇帝カール5世）が隠遁先のユステ修道院へ向かった「皇帝の道」（Ruta del emperador）、またサラゴサでは「エル・シッドの道」といった歩くためのトレイルが整備されている。サンティアゴ・デ・コンポステラの聖フランシスコ教会内で案内されているイタリアの聖フランチェスコの道を歩くことも10年以上前からヨーロッパの学生たちの間で人気がある。なかでもサンティアゴ巡礼路である Camino de Santiago とその姉妹道となった熊野古道は、現在世界に2つしかない「道」の世界遺産であり、Camino de Kumano が合言葉となっている。今日のスペインのサンティアゴ巡礼路と熊野の参詣道については徒歩巡礼という共通点があり、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂と熊野大社本宮をそれぞれ目指して歩く。

サンティアゴ巡礼路と熊野古道は共にその起源を千年以上に遡る歴史的「巡礼の道」として知られ、その距離はいずれも全長数100キロメートルに及ぶ。熊野という地名は、他に丹後の国、田島国二方郡の熊野郷、出雲国の熊野山と熊野大神があるが、いずれも畿内の周縁部にある。熊の原義は「隈」で、奥まったところを意味し、牟婁も室が原義で同じような意味になる。野は未開地を指すことから、熊野とは奥まったところにある未開地を意味し¹、イベリア半島の周縁に位置するガリシア地方と類似の地理的環境にあったといえる。

北西スペインのサンティアゴ巡礼路はアストゥリアス王権により成立し、カスティーリャ王国の時代まで王がサンティアゴ・デ・コンポステラへ徒歩もしくは馬での巡礼を行い、王による巡礼が途絶えると民衆信仰により支えられるようになる。熊野詣は、七上皇による190年間にわたる101度の行幸により確立し、上皇



図1 サンティアゴ・デ・コンポステラの聖フランシスコ教会内の聖フランチェスコ巡礼路の案内
(2019年9月筆者撮影)



図2 「皇帝の道」
(2011年8月筆者撮影)



図3 ユステ修道院
(2011年8月筆者撮影)

の御幸が絶えてからは民衆による「蟻の熊野詣」へと移り変わっていく。本論文では、このように地理的・歴史的に共通点を持つ二つの道を比較し、今日の巡礼の諸相についても考察したい。

1. 熊野参詣とサンティアゴ巡礼確立の比較史

サンティアゴ・デ・コンポステラ教会の縁起は、834年のアストゥリアス王国のアルフォンソ2世貞潔王の時代に「使徒ヤコブ（スペイン語のサンティアゴ）の遺体が顕現した」ことに遡る。ガラエキア（現在のガリシア地方）は、ローマ帝国の属州ルシタニアに入った後もキリスト教化に抵抗した。帝政末期のガラエキアで活発な宗教活動を行った4世紀後半の異端者プリスキアヌスの教義は、その後、西ゴート王国に対して政治的独立を保ったスエヴィ王国と緊密に結びついていった²。

レコンキスタ期に入ってもガリシア地方はアストゥリアスとは別に独立してイスラームに抵抗を続けており、アストゥリアス王国にとってガリシアを王国教会の管理下へと吸収することが不可欠だった。そこで6世紀半ばまで根強く信じられていた、トリアで殉教したプリスキアヌスの遺体が12名の弟子たちによってサンティアゴに埋葬されたという伝説と聖ヤコブ遺骸発見を接続させ³、王国の教会編成に組み込んでいったとされている。

844年にラミロ1世が率いたクラビホの戦いの際には、聖ヤコブが馬に乗った騎士の姿で顕現し「イスラーム教徒殺しのサンティアゴ」のイメージが誕生した。中世中期にサンティアゴは、レコンキスタに加護を与えてくれる聖人として崇敬を集め、サンティアゴ・デ・コンポステラはローマ、エルサレムに匹敵する巡礼の聖地となる。ペドロ・マルシオによる12世紀後半の偽文書によると、ラミロ2世期（931-950年）の「サンティアゴの誓約」により、イスラーム教徒軍に対する勝利の感謝からサンティアゴ教会への寄進がされるようになり⁴、アストゥリアス、レオン、カスティーリャの王たちがサンティアゴ・デ・コンポステラへ徒歩または馬で巡礼が行うようになったとされる。サンティアゴ・デ・コンポステラは、トレド、セビーリャに並ぶスペインの三大司教区となり威信を増していくが、後期中世には王権との関係が衰退し、民衆信仰に組み込まれていく。

熊野古道のある紀伊山地は、6世紀に仏教が伝来して以降、山岳修行の場となり、9世紀に空海が招来した真言密教もまた修行の場とした。9世紀から10世紀には、「神仏習合」思想や「本時垂迹説」によって、その聖地として信仰を集めた。10世紀中頃から11世紀には修験道が成立し、神仏習合や本時垂迹説が、末法思想や浄土教の教えとともに貴賤を問わず広く流布した。これにともない、都の南に位置する紀伊山地は仏教諸尊の浄土があるとされ、紀伊山地の霊場としての性格がより一層強められた⁵。

都から相対的に独立していた熊野が中央の寺社勢力の秩序に組み込まれる画期となったのは、白河法皇第一回参詣である。経済的に貧弱であった熊野山に、上皇が進発にあたり紀伊国田畑100町を寄進し、別当の地位が著しく上昇し、その権威を背景に三山の一体化と統制が進められる。熊野別当が熊野一帯の政治、経済、軍事の実験を握り、山伏や地域住民を組み入れて支配するようになり、その富と権力は国司や領主をしのぐほど大きいものとなった⁶。

巡礼最盛期となるのは白河院が1090年に詣でてから、1281年亀山院の「蒙古降伏祈願」の御幸をもって上皇の熊野詣が終わるまでの、「上皇の熊野詣」と称される七上皇による190年間にわたる101度の行幸があっ

表1 アストゥリアス、レオン、カスティーリャ王のサンティアゴ巡礼⁹

	巡 礼	備 考
アストゥリアス王国		
アルフォンソ2世 (760-842年)	824年にオビエドからサンティアゴ・デ・コンポステラへ巡礼・プリミティブの道の最初の巡礼を行う。	
アルフォンソ3世 (852-910年)	872年にサンティアゴ・デ・コンポステラへ巡礼史、アストゥリアス王国の紋章、貴石で飾られた黄金の十字架を寄贈し、874年にヒメナ王妃と帰着。	40年以上の長い治世の間、使徒ヤコブの墓の喧伝に貢献し、巡礼を推進させる。
ラミロ2世 (931-951年)	932年にサンティアゴ・デ・コンポステラへ巡礼。	
レオン王国		
アルフォンソ7世 (1105-1157年)	1111年にサンティアゴ・デ・コンポステラに徒歩巡礼	トレド大聖堂に埋葬
フェルナンド2世 (1137-1157年)		サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂に埋葬
アルフォンソ9世 (1188-1230年)	1230年メリダ、バダホス、エルバスの再征服後サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の途上のサリアで59歳で突然崩御。	堂に埋葬サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖
カスティーリャ・レオン王国では王によるサンティアゴ巡礼が廃れる。		
サンチョ4世 (1284-1295年)	1286年にサンティアゴ・デ・コンポステラへ巡礼	
アルフォンソ11世 (1312-1350年)	1332年歓喜の丘からサンティアゴ・デ・コンポステラ、パドロンへ巡礼	

表2 上皇の熊野詣¹⁰

上 皇	時 代	回 数	
宇多上皇	907年	1	
花山上皇	986年	1	
白河上皇	1090年～	12	1090年初の熊野御幸、紀伊国の田畑百余町を熊野山に寄進。以降12回参詣
鳥羽上皇	1125年～	33	白河上皇、鳥羽上皇、待賢門院が熊野御幸。鳥羽上皇は初めての御幸で以降22回参詣。女院の参詣は初見。1134年平忠盛、鳥羽上皇、待賢門院が熊野御幸。1152年鳥羽上皇、美福門院、姫宮が熊野御幸。
崇徳上皇	1134年～	1	鳥羽上皇、崇徳上皇、藤原忠実の母らが熊野御幸。崇徳上皇は最初で最後の御幸。
後白河上皇	1160年～	34	1160年初の熊野御幸。以後32回参詣。1167年女御平滋子と熊野御幸。1169年建春門院と熊野御幸。
後鳥羽上皇	1201年～	29	1201年後鳥羽上皇が藤原定家らと共に熊野参詣。
承久の乱により熊野山の僧兵多数が上皇方で出陣し、敗北。1221年以降、熊野御幸が激減。			
後嵯峨上皇	1250年～	2	
亀山上皇	1281年	1	上皇の熊野詣終結

た時期である。三院御幸のような熊野詣の大規模化は、専制権力をふるった上皇の政治的なデモンストレーションの意味があり、後鳥羽上皇による全期間間断のない参詣は、準国家的な年中行事として定着した⁷。上皇の熊野詣は、1221年の承久の乱で院政政権が解体することで歴史的役割を終える。

貴族の参詣は承久の乱の後13世紀半ばまで続き、鎌倉時代中期ごろまで盛んであった。承久の乱以前から、鎌倉幕府の関係者も参詣するようになり、1208年、1218年に行われた北条政子の二回の参詣が武家の女性の参詣の嚆矢となるが、これは京都の貴族の風習にならったものである。室町将軍は伊勢参宮し、将軍家の女性は熊野詣をするなど男女による分業が見られ、将軍や執権が熊野に参詣することはなく、サンティアゴ巡礼のような戦勝祈願の側面はみられない。病氣治癒などの熊野権現の奇跡は、現世利益を求める一般庶民への信仰の浸透していき、1693年初出の「蟻の熊野参り」⁸時代とに熊野は神道、仏教、性別、身分職業問わず、あらゆる人びとを受け入れ、西国巡礼、坂東巡礼、四国遍路などの現在も盛んな巡礼のさきがけとなった。

熊野とコンポステラは、宗教的な中心地だった場所が王権とつながりを持ち、寄進を得て確立していくという過程において共通している。また9世紀に始まったサンティアゴ巡礼路は11、12世紀に、同じ9世紀に始まった熊野古道も10-12世紀と最盛期を迎えるなど時期的な類似もみられる。スペインの王とは異なり、熊野では現役の天皇の行幸は見られず、アストゥリアス、レオン=カスティーリャ王のそれぞれ一回と比べるに修験道や三山検校の行尊の影響により上皇の巡礼の回数が多い。

騎士聖人でもあったサンティアゴとの共通点として熊野の伝説に欠かせないのが、神武天皇の夢に現れ、戦を勝利に導いた八咫鳥である。『古事記』の「神武天皇紀」には神武東征の際八咫鳥の導きによって中州（大和の国）に入る際、「いまあめ今天より八咫鳥の遣せむ。故れ其の八咫鳥おこ引導かきてむ。其の立たむ後より幸行でまししかば」¹²とあり「よきゆめ靈劔師靈によつて生氣を取り戻した皇軍は、勇躍大和に赴かうとしたが、山は峻嶮にして路もなく進退谷つてしまった。此の時、皇祖天照大神が天皇の御夢に現はれ給うて我今頭八咫鳥を差し遣わすから、それを嚮道者とせよと仰せられた。果たして頭八咫鳥が大空より翔び降りて来た。天皇は此の鳥の来たことは自然と祥夢に叶って居る。嬉しさの極みである。正しく皇祖天照大神が天業の恢弘を御助け下さる思召に相違ないと仰せられた。そこで大伴氏の祖先の日臣命が皇軍の将として鳥の向かふところに随つて進軍し、大和國菟田下縣に到着した。天皇はこの日臣命の忠勇をいたく喜びたまひ先導の功にちなんで勅して名を道臣と賜はつた」¹³とある。

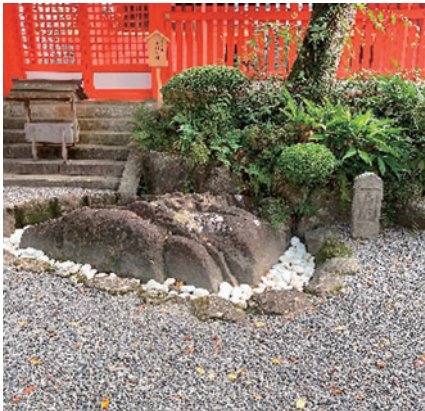


図4 熊野那智大社の八咫鳥
(2020年8月筆者撮影)



図5 熊野大社本宮の八咫鳥
のポスト
(2020年8月筆者撮影)



図6 雨宝童子像五大院より¹⁴

ラミロ1世のクラビホの戦いについての記述のある844年5月25日付の「信仰特権」には、睡魔に襲われた王が眠り込むと、聖ヤコブが「イスパニアの守護聖人ヤコブが人の姿で顕現し神の手によって包囲しているサラセン人の大軍を圧倒するだろう」と告げ、約束通り神の幸なる使徒が顕現したとある¹⁵。「イスラーム教徒殺しのサンティアゴ」のような騎士聖人による加護といった戦勝祈願の側面は熊野詣にはないが、王の夢に戦勝への導き手が現れる伝説が共通している。東アジア世界の戦の導き手である三足鳥（八咫鳥）は、漫画や小説、また戦いにおける連絡係の鵙鴉として『鬼滅の刃』にも登場するが、今日、熊野の重要な

表象として確立している。

2. サンティアゴ巡礼路と熊野古道の徒歩巡礼比較

中世の『巡礼案内書』には「巡礼は、自発的で無償の行為である。巡礼によって人は慣れ親しんだ場所、習慣、親しい人びとを捨てて、宗教心をいだきながら、みずから選んだ、あるいは命じられた聖域まで行く」¹⁶とあるが、各地に存在する聖人の聖遺物を訪ねる巡礼の動機は、贖罪、平癒祈願、戦勝祈願など時代により様々で、キリスト教徒にとって天国に入るひとつの方法である。巡礼を行わない信者にも天国の扉は開かれており¹⁷、必ずしも義務ではないにもかかわらず、人は、中央から容易に通えるところではなく難所が多い苦難の旅を行ってきた。

熊野古道の道沿いには熊野三山から金剛童子など勧請して祀った末社である「王子社」がある。「王子」の語は、「童子」「御子神」の意味で、熊野本社の御子神信仰に、仏説の王子（童子）の宗教観念が習合されたものと推測されている。室町時代には「九十九王子」と称されるほどつくられ、たいていその土地の地名が冠されている¹⁸。熊野詣そのものは三山への参詣が主眼であったことは勿論だが、古道を辿る困難や辛苦の過程を経てこそありがたさが倍加するもので、徒歩で行うしかなかった熊野詣の困難さが古道沿いにある王子社の成立を促進していったことが想像できる。そして現代の巡礼者やハイカーも王子跡を辿ることにより安心して山中を歩くことが出来る。

道の普遍的価値はこの「歩く」ということと密接に関係している。山岳写真家白旗史朗が「一步一步の苦しさを克服して、小さな石ころや風を感じることに、自然があつて現在の自分があると思える。宗教がかかっています」¹⁹というように、徒歩と宗教は密接な関係になりやすい。それゆえ徒歩巡礼には祈りや懲罰、癒しや浄化といった日常の暮らしとは異なるある種の異種体験が伴っている。歩き出したら完全に頭が空っぽになり、歩いているのか歩いていないのかわからなくなる、登山でいうところのワンデリングが、仏教でいう「空」にあたるのではないだろうか。徒歩巡礼のための費用や時間の捻出、歩くことの苦痛や危険、食事や宿泊所などの不安といった難行苦行を経てたどり着くサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂や熊野本宮大社が、健康の保持や達成感、知見の獲得と共に「死と再生」もしくは「蘇りの地」「再生の地」とされているのも歩くがゆえであろう²⁰。

有名なモンセラットやルルドなど歩かなくてもよい巡礼も多い中、現代のサンティアゴ巡礼は徒歩巡礼を重視し、また熊野古道も歩く必然性はないながらも、東海道などとは異なり生活路と参詣路が一緒ではなく、徒歩でなければアクセスできない王子社が多い。これら二つの道は連続して行なわなくてもよい、または歩かなくてもよい御朱印のシステムとは異なる。連続徒歩巡礼を念頭に2015年にサンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路と熊野古道を巡る「共通巡礼手帳」がスペインと共同でつくられ、2016年からは二つの聖地を歩いて巡礼した人への証明書の発行が始められたのは、このような背景によるものだろう。

「二つの道の巡礼者」となるためには、それぞれの巡礼路において、下記の中からいずれか1つを達成する必要がある。サンティアゴ巡礼路は(a)徒歩または馬で少なくとも最後の100km以上を巡礼する。(b)自転車でも少なくとも最後の200km以上を巡礼する。熊野古道は①徒歩で滝尻王子から熊野本宮大社まで巡礼する(38km) ②徒歩で熊野那智大社から熊野本宮大社(30km)間を巡礼する ③徒歩で発心門王子から熊野大社本宮(7km)まで巡礼するとともに、熊野速玉大社と熊野那智大社に参詣する。④徒歩で高野山から熊野大社本宮まで巡礼する(65km)²¹。

以下は、毎年夏は海外出張をしてほとんど国内旅行をしない筆者が一昨夏のサンティアゴ巡礼路で巡礼証明書を経た経験を踏まえて、昨年熊野古道完歩証との「二つの道の巡礼者 Dual Pilgrim」を得るまでの所感を比較するものである。

中世にもっぱら利用された中辺路は、田辺から道を東にとって山中に分け入り熊野大社本宮に至る道で、王子もこのルートに集中的に置かれている。口田辺と呼ばれていることから、サン・ジャン・ピエ・ド・ポーのようなイメージを持っていたが、サン・ジャンやサリアで見られたトレッキング用品店も目に付くところではなく巡礼の起点という雰囲気はない。通常でも人の少ない世界遺産として人気のある熊野古道だが、田辺観光センターに共通巡礼手帳をもらいにいったところ、夏のこの時期に、特にコロナ禍のなか熊野古道をする人は誰もいないとのことである。普段であれば世界中から巡礼者が殺到するにもかかわらず、田



図7 中辺路の王子社 (写真左上から滝尻王子、不寝王子、大門王子跡、十丈王子、大坂本王子跡、近露王子、発心門王子、水呑王子跡、払殿王子跡、伏拝王子跡、浜ノ宮王子、市野々王子、多富気王子、湯の峰王子) (2020年8月筆者撮影)

辺からの熊野古道でクレジットカードが普及していないことに困惑した。田辺市熊野ツーリズムビューローが運営する Kumano Travel から宿を手配してもらえば、クレジットカードで宿泊施設の支払いまで行ってくれ、多額の現金を持って歩くことを避けることができる。

初日は滝尻王子から歩き始めることとしたが、田辺からのバスが朝一本しかなく、朝が早く暮れるのが早



図8 共通巡礼手帳

い日本にしてはかなり遅い時間に始めなければならない。アスファルトを渡って古道に入るところなどは基本サンティアゴと同じである。バルが多くあったスペインと比べると好きな時間に食事をとれる場所がなくて困ったが、徒歩巡礼の起点となる滝尻王子そして滝尻と高原の途中にはきれいなカフェが数件ある。今回寄らなかったが高原の霧の郷たかはらは、オーナー自らサンティアゴ巡礼路を行いグローバルな感覚で運営をしているということで、周辺民宿はそこに学びに行くように言われているそうである。フランス人の道と同様に、滝尻から熊野大社本宮までの中辺路には次の目的地まで荷物を運んでくれるサービスがあり、それを知らなかった筆者はピレネー越えと同じフル装備で歩き続け「山岳救助の方ですか？」と声をかけられる程浮いていた。また特筆すべきは熊野古道の公衆衛生のレベルの高さで、トイレがバル任せで道端に入るとトイレトーパーだらけだったスペインとは異なり、至る所に清潔に保たれたトイレがあり、清潔な飲食店と合わせて官民で道が整備されているのに感動した。



図9 Dual pilgrim 完歩証

滝尻王子から歩き始めたのは他に一人しかいなかったが、jBuen Caminolのような挨拶が交わされることもなく、大坂本王子跡ですれ違った二人連れも巡礼スタンプを押しておらず、帆立貝のような認証ツールもないことから特に巡礼者同士の連帯感のようなものはなかった。これは外国人巡礼者がいる状況であれば異なっているに違いない。旅館の方の感覚では、熊野古道を歩いているのは95%外国人で、日常から非日常への切り替えとなる数日かけて歩くような巡礼は日本人には想定されていないようである。熊野本宮館の令和2年6月30日までの過去65か月間の共通巡礼達成者登録状況の資料によると、国籍の割合は日本人が24.6%、オーストラリア人17.1%、アメリカ人11.8%、スペイン人9.7%と、既にコロナにより外国からの巡礼者が来ない時期を加えても外国人が75.4%を占める。サンティアゴ巡礼者数の割合のうちスペイン人の占める割合が51.5%²²なのと比較すると、熊野古道を歩いている人の中で外国人の占める割合はとても高い。発心門王子から本宮までは小さなペットボトルとタオル一枚だけ持った人が歩いており、巡礼手帳を持っていなかったが、日本人はガイドブックに倣ってこのように歩く人が多いのだろう。日本人は休みが少ないせいもあり、目的地に車で行って少し買い物をして帰るパターンが多く、数日間かけて連続徒歩巡礼をすることは少ない。ただこの宿泊施設も今後数日かけての連続した徒歩巡礼による滞在のシステムができるとありがたいとのことだった。

巡礼はサンティアゴの100km以上、中辺路ルート²³の37kmを中心としたいくつかのルートがあり、熊野の一区画13kmほどからするとサンティアゴの一区画25kmというのは大変に思えるが、気候面では熊野の方が厳しい。日程の調整がつかず38.8度の猛暑注意報が出ている中歩いた方が悪いが、夏でも木陰に入れば体が休まるピレネーとは異なり、風が渡る音一つ聞こえない蒸し暑い中を進む夏の熊野古道はなかなか過酷である。熊野古道は「道」というよりは山が多くて、常時短めのナポレオン・ルートを歩いているような気が

した。近露では皆がよく知る民宿ちかつゆに投宿した。料理もおいしく居心地のよい素晴らしい宿だったが、コロナにより他の宿泊客はなくひすいの湯も閉鎖されており、経営も大変な状況にあるようであった。

猛暑のため上記①から③に計画を変更した。新宮までは道の駅瀬峡街道熊野川から船で行くことができる。熊野川は世界でただ一つの川の世界遺産で、三反帆と呼ばれる川舟は三重県の道路整備が困難なことを背景に千年以上の歴史がある。上皇や貴族が好んで訪れ、江戸時代には裕福な一般の人たちも川舟を使って参詣したとのことで²³、川の参詣道を予約したがこちらも濁水でキャンセルとなった。本宮からは、大斎原から大日越をして小栗判官蘇生の湯で有名な湯の峰温泉に宿泊した。こちらは1800年以上前に発見されたとされる唯一の温泉の世界遺産で、湯垢離場で身を清めてから参詣する人も多く、「万病消除」の効能から、『長秋記』でも湯峯で入浴することは広く行われていた。また川湯温泉は『中右記』に川の中の壺湯「谷底に温泉・寒水並び出す」²⁴とあるように、川の底から湯が湧く確かに水と混ざる温泉で平安後期の記事を追体験できる。



図10 世界遺産「湯の峰温泉のつぼ湯」(2020年8月筆者撮影)

お世話になった湯峯荘のスタッフによると、宿泊客のほとんどがオーストラリア人やアメリカ人、スペイン人といった外国人で、柔軟に外国人に対応できるべく有名大学卒の高学歴のかつサンティアゴ巡礼経験者のスタッフが入っていた。また外国のエージェントからの要望で、ここ2、3年、連続徒歩巡礼に合わせて各区画の目的地に荷物を運ぶサービスが参入してきたとのことで、急速に「フランス人の道」に寄せた整備が進んでいるようである。食事についてはシーズンオフのためかおしゃれなカフェもあったが、基本的にうどんを中心とした和食しかなく、外国人には厳しいかもしれない。サンティアゴ巡礼路を歩いていたスペイン人が日本では朝に干物が出るのが辛かったと言っていたのを思い出した。

次にアスファルトの道を速玉大社まで向い、続いて那智大社まで歩いたが、徒歩巡礼をしている人はおらず、車で行く観光地のようなのである。残念だったのは美滝荘に泊まって、歩くことを予定していた青岸渡寺の裏手から始まる上記②の大雲取越・小雲取越を猛暑のため断念せざるを得なかったことである。近辺の小学生のトラウマとなっている遠足らしく、いきなり800mを登るピレネー越えと似たルートである。気候のよい時は朝3時起きで一気に越える外国人もいるそうである。

那智勝浦からは猛暑のためレンタカーで紀伊半島の海岸線に沿ってぐるりと回る大辺路を見たが、炎天下、中辺路でも見なかったような本格的な装備をした巡礼者（かどうかは認証ツールがないためわからない）が一人、車がスピードを出して走る国道沿いを歩いていた。大辺路沿いの居酒屋では外国人巡礼者の残した多くのメッセージがあり、日本語がわからなくてもフレンドリーに接してくれ、日本人の常連さんと肩を並べて食事ができたのがよかったと寄せられており、外国人巡礼者の多さが伺われる。上記④にあたる小辺路についても猛暑により今回は断念した。高野山宿坊協会によると、多い時で1日10件程度小辺路に問い合わせがあったが、圧倒的に町石道を歩く人が多く、徒歩巡礼は高野山ではほぼ完結しているようである。小辺路を少しだけ歩いたものの道標がわかりにくく、階段も一部損傷した杭が出たままの状態であって座って休む気にもならない。乳岩の説話のように出産した赤子をみてくれるような熊野古道とは異なり、小辺路に接続する女人道からは高野山に入ることはできない。野迫川まで聖地巡礼バスで小辺路と並走する



図11 小辺路の入口

と車通りの多い県道沿いに巡礼者注意の看板があり、装備をした男性が一人歩いていたが、ほたて貝や四国遍路のような装束がないので、巡礼なのかトレッキングなのかはわからない。小辺路については十津川温泉からの歩きを体験してみたい。

熊野古道は直線型のサンティアゴ巡礼路とやや異なり、回遊型の側面があるため既に何度も通っている熊野大社本宮に、本宮館でDual Pilgrimの証明書をもってから最後に改めて訪れた。お話をたくさん伺い太鼓を叩いてもらったが、こちらは巡礼者に対する伝統的な対応ではなく、田辺市観光センターからの依頼で知恵を絞ってできることをやっているとのことである。歩きながら話を聞いたことをまとめると、今日の熊野古道は田辺市側の働きかけと、ロッキー山脈のガイドをしていたALTのカナダ人教師のブラッド氏による欧米人の目線による最初の整備を行い、サンティアゴ巡礼路を参考としたサービスを取り入れて成功しているといえる。

多くの外国人が来ることでブラッシュアップされてきた熊野古道だが、今後数日かけて徒歩巡礼をするインバウンド・アウトバウンドの滞在者をのぞむのであれば、まずカードを使えるようにして欲しい。また何日もかけて歩くとなると旅館型の豪華で量の多い食事をするにはできないので、サンティアゴ巡礼路にあるMenú del Peregrino (巡礼者メニュー)のような簡単な食事ができる場所が要所にあるとよい。日本のサービス過多がかえって長期滞在を妨げているように思う。また朝食の時間を待っている間に日が登ってしまうので、朝食はGîte (フランスの宿泊施設)のように朝暗いうちの巡礼者に合わせた時間帯に、セルフで市販のヨーグルトとマドレーヌとフルーツとコーヒーが飲める程度というのがありがたい。旅館や民宿では浴衣が出るのが嬉しいが、必ず他の沢山の洗濯物が出るので、フランス人の道や近露から那智の中辺路の区間の宿には必ずついているコインランドリーをもっと古道沿い全域に広げてほしい。また旅館・民宿型の大部屋と共同のお風呂では特に外国人には思うように休めないで、サンティアゴ巡礼路沿いの宿のような清潔なシャワーがついた素泊まりできる個室が増えると連続徒歩巡礼の数日間滞在のニーズに合うのではないかと思う。



図12 熊野大社本宮

おわりに

長い道を歩く世界遺産の巡礼路はスペインのサンティアゴ巡礼路と熊野古道の2例しかない。この二つの道は宗教的な場に王権が介入して巡礼路として整備し、のちに民衆信仰によって支えられ、一度は廃れてしまったがまた世界遺産となるという相似が見られる。世界遺産になったのちは、住民がゴミを拾い道標を立てるところからはじめ、急速にグローバルな観点からローカルな文化的観光が最適化され、世界中から多くの人々が歩きに来るようになった。二つの巡礼路では共通巡礼というプロジェクトをやっており、巡礼の中の歩いているその中に価値があると実感している人が多いからか、長い道を歩く人が予想を遥に上回り令和2年8月31日にはコロナ禍にも関わらず3409人の共通巡礼達成者がいる。それには長距離のトレイルができるような環境づくりが欠かせないが、特に中辺路の滝尻王子から熊野大社本宮までの区間は日本的なおもてなしとヨーロッパ的な過ごし方ができる稀有な場となっている。

付記

本稿は、2020年度静岡大学公開講座「巡礼路から見る世界—サンティアゴ、イングランド、四国遍路—」での発表内容「熊野古道とサンティアゴ巡礼路—「二つの道の巡礼者」の比較—」に依拠したものである。

謝辞

本研究は、JSPS科研費「スペインとメキシコにおける聖ヤコブ信仰の継続と変容の統合的分析」(17K02037)の助成を受けたものである。

情報を提供して下さった、熊野古道自然・歴史・文化ネットワーク理事長 林伸行氏、副センター長・事務長 宮本秀男氏、田辺市熊野ツーリズムビューロー 神田智子氏にこの場を借りて謝意を表す。

註

- 1 小山靖憲『熊野古道』岩波新書、2000年、3-4頁。
- 2 Díaz, P.C., *El reino suevo (411-585)*, Ediciones Akal, Madrid, 2011, p. 207-208.
- 3 杉谷綾子『神の御業の物語 スペイン中世の人・聖者・奇跡』現代書館、2002年、117-120頁。
- 4 Rey Castelao, O., *La historiografía del Voto de Santiago*, Universidad de Santiago de Compostela, 1985.
- 5 五十嵐敬喜ほか編著『世界遺産熊野古道と紀伊山地の霊場』、ブックエンド、2016年、7-8頁。
- 6 細野昌子『熊野古道』新評論、2003年、223頁。
- 7 小山靖憲、前掲書、30頁。
- 8 小山靖憲、前掲書、67-68頁。
- 9 *Códice calixtino* (trad. y notas Moralejp, A., Torres, C., y Feo, J., ed. García Blanco, M.J.), Alvarellos editora, Santiago de Compostela, 2016, p. 18. Porro Girardi, N.R., *La investidura de armas en Castilla del rey sabio a los Católicos*, Valladolid, 1998. を参照して筆者作成。
- 10 横田健一他『熊野古道』向陽書房、1994年、21頁。
- 11 荒坂津史蹟顕彰会編『神武天皇熊野巡幸叢説』荒坂津史蹟顕彰会、1938年、4頁。
- 12 「神武天皇紀」『古事記・日本書記』香草舎、1938年、5頁。
- 13 内務省神社局考証課編『神武天皇御記（日本書紀卷第三）謹解』橿原神宮社務所、1940年、27-28頁。
- 14 令和2年度春期企画展「ほとけさまと動物たち」高野山霊宝館のチラシより。
- 15 Marqués Villanueva, F., *Santiago: trayectoria de un mito*, ediciones bellaterra, Barcelona, 2004, pp.188-189.
- 16 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ（杉咲泰一郎監修）『サンティアゴ・デ・コンポステーラと巡礼の道』創元社、2013年、29頁。
- 17 グザヴィエ・バラル・イ・アルテ（杉咲泰一郎監修）、前掲書、31頁。
- 18 細野昌子、前掲書、19頁。
- 19 BSプレミアム「パキスタン 高峰の花園に魅せられて」『わが心の旅』1999年。
- 20 五十嵐敬喜ほか編著、前掲書、120-124頁。塚本明「熊野街道『伊勢路』の特質—江戸時代の道中記から—」『熊野古道と世界遺産と考える』、2008年、6-21頁、p.7

- 21 共通巡礼手帳より、下線部は筆者。
- 22 今野喜和人「コンテンツツーリズムとしてのサンティアゴ巡礼」静岡大学公開講座、2020年11月7日配布資料。
- 23 谷上嘉一「川の道 熊野川の活用について」『熊野古道と世界遺産を考える：第9回全国歴史の道会議三重県大会報告書』、第9回全国歴史の道会議三重県大会実行委員会、2008年、27-31頁、27-28頁。
- 24 小山靖憲、前掲書、39頁。